

粒度という考え方
-日英語の「使役文」を例に-*

前田 宏太郎¹

1. はじめに

まずは以下の日本語の例から考えてみたい。

(1) メアリーが髪を切った。

(1) の解釈は少なくとも以下の2通りある。²

(2) i. メアリーが自分で自分の髪を切った。

ii. メアリーが(美容院で)誰かに髪を切ってもらった。

ところが、(3) の英文は (2i) の解釈しか持たず、

(3) Mary cut her hair.

(2ii) の解釈を得るには (4) のように言わなければならない、と言われることがある (cf. 金子, 2013)。

(4) Mary had her hair cut.

以上のことは、例えば次のように説明されるだろう。

(5) 日本語で「髪を切る」と言った場合には、美容院で髪を切ってもらう場合

*本発表の内容は前田 (2021) 及び六甲英語学研究会での発表 (2021年6月20日、オンライン) に基づく。また、今回の学会運営及び発表のお誘いをくださった宗像孝氏に感謝申し上げます。

¹ 信州大学全学教育機構助教 maeda_k@shinshu-u.ac.jp

² 当然、「メアリーが(自分以外の)誰かの髪を切った」という解釈もあり得るがここでの議論とは関係ないので取り上げない。

にも、自分で自分の（あるいは他人の）髪を切る場合にも使えるが、英語で“cut one’s hair” というと後者の場合にしか用いることはできず、前者の場合には使役動詞³ have を用いる必要がある。

本発表は、実は英語も日本語同様の振る舞いを見せること、つまり、(3) でメアリーが美容院で髪を切ってもらった場合も表せることを指摘し、この種の使役文における日英語の共通点・相違点を「粒度」という観点から考察する。

2. 使役文の2タイプ：語彙的使役文と迂言的使役文

日本語の「使役」に対応する英語には、以下の (6) と (7) にあるように、“causation” と “causative” が存在する。前者が使役の「意味」に対応し、後者がその意味を表す「形式」に対応する。

(6) cau·sa·tion

— *n.*

[1]

a 原因となること, 引き起こすこと, 原因作用.

b 結果を生み出す作用 [もの], 原因力.

[2] 因果関係 (causality).

⇒LAW¹ of causation. (太字筆者. 『新英和大辞典』)

(7) cau·a·tive

— *adj.*

[2] 〔文法〕原因を表す, 使役的な (cf. factitive 1).

a *causative verb*

使役動詞

a *causative suffix*

動詞化接尾辞 《darken, realize の -en, -ize など》.

— *n.* 〔文法〕使役動詞 (causative verb) 《He made me eat the apple. の made, または fall に対する fell, rise に対する raise など》.

(太字筆者. 『新英和大辞典』)

また、(7) における「使役動詞」という用語はその記述にもあるように、2つの動詞のタイプを含んでおり注意が必要である。1つは (8a) の語彙的使役文を

³ 2節で述べるように使役動詞には2つの意味がある。

構成する動詞、もう 1 つは (8b) の迂言的使役文⁴を構成する動詞である。そして、1 節の冒頭で挙げた (3) と (4) がそれぞれ対応する。

- (8) a. Mary cut her hair. (=3)) 語彙的使役文 (Lexical Causatives)
 b. Mary had her hair cut. (=4)) 迂言的使役文 (Periphrastic Causatives)

表面上の (あるいは統語的な) 違いとして、語彙的使役文は因果関係を述語 1 語 (*cut*) で表すのに対し、迂言的使役は述語が 2 語 (*have, cut*) 必要である。この点が「迂言的」と言われる理由である。

3. 第 3 の使役文：介在使役文

(8a) が (2ii) の解釈を得られない (とされている) ことに対しては、納得できる人は多いだろう。(2ii) の状況というのは美容師がメアリーの髪を切っているのだから、この美容師の存在を無視するような (8a) の表現は適さず、(8b) のように表現しなければならない。⁵

ところが、実際には英語でも日本語と同じように (2ii) の解釈、すなわち、因果関係の中間に存在するものを無視する解釈を取ることができる。⁶

(9) Nixon bombed Hanoi. (Lakoff and Johnson 1989: 38)

- (10)a. John built a new house.
 b. John repaired his watch. (Ikegami 1982: 96)

⁴ 「迂言的使役文」の他に「生産的使役文 (Productive Causatives)」「統語的使役文 (Syntactic Causatives)」「形態的使役文 (Morphological Causatives)」などの言い方がある。生産的使役文は迂言的使役文と同義だが、厳密には、統語的使役文は英語の *make* のように自由形態素 (Free Morpheme) を用いる迂言的・生産的使役文に、形態的使役文は日本語の *-(s)ase* のように拘束形態素 (Bound Morpheme) を用いる迂言的・生産的使役文を指す。

- (i) 迂言的・生産的使役文
- 統語的使役文：自由形態素 (英語の *make* など)
 - 形態的使役文：拘束形態素 (日本語の *-(s)ase* など)

⁵ (8b) も美容師そのものを明示してはいないが、「他者によって」という含みは使役動詞 *have* によってもたらされている。

⁶ (9) と (10) は長谷川 (2010) より、(11) と (12) は金子 (2013) より引用した (強調原文)。なお、金子 (2013) ではこの他にも実例が挙げられている。

- (11)a. The invalid owner ran his favorite horse (in the race).
 b. Chris cut hair at the saloon on University Avenue.
 c. She painted her house (when in fact the painters did the painting).
 d. The company flew her to Chicago for an in interview.
 e. Farmer Joe grew those grape vines. (Goldberg 1995: 169)
 f. She buried her husband. (Lee 2001: 96)
- (12)a. I'm thinking all of this because I've recently built a new house.
 —Bill Gates, *The Road Ahead*.
 b. “We are building something larger, better, newer,” Developers are responding to the demand. —*Time*, May 12, 1986.
 c. Jamie McGregor had built his house on a kopje, one of the hills overlooking Klipdrift. —Sidney Sheldon, *Master of the Game*.
 d. The painter had built this high house, a pagoda without dragons, on a slope of pines on the first of hills behind Greenwoods. —John Updike, *Marry Me*.
 e. I certainly remember one instance when Haraldsen had talked to me about a house he was building in a little island somewhere in the north.
 —John Buchan, *The Island of Sheep*.
 f. In this area, few people stay —or stayed— at hotels. They built their own houses, or rented a native one for the summer, and took the whole family.
 —*Time*, July 12, 1965.
 g. “Mr. Hanley wants to build a summer house in Tonganoxie.”
 —Sidney Sheldon, *Morning, Noon & Night*.
 h. He will build me a house, a home with a garden on a hill overlooking the sea.
 —Erica Tachikawa, *Onion Tears* (translated by Kate McCandedless)
 i. Mr Fox planned to build himself a home very near the village.
 —BNC [Miyashita 2011:144]

今回問題にしている “cut one’s hair” も (13b) に見られるように (2ii) の解釈が可能なようであるし、この種の解釈が可能な動詞は *cut* に限らない。

日英語におけるこの種の文は「介在使役文 (Intermediary Causatives)」と呼ばれており、語彙的使役文や迂言的使役文の中間に位置するものとして分析されている (鄭 (2006); 長谷川 (2010); Komatsubara (2019); 佐藤 (2005); 澤田 (2008) など)。⁷

⁷ 長谷川 (2010) は英語を、その他は日本語を分析対象としている。

「介在使役文が語彙的使役文と迂言的使役文の中間に位置する」ことについては、澤田（2008: 62）が次のような説明をしている。

- (13) 「介在使役」は、他動詞単独による単文構造からなる点では、「直接使役」と似た振る舞いをなすが、主体（NP1）と対象（NP2）の間の因果連鎖が「間接的」である（第三者の行為を介する）点では「間接使役」と似た振る舞いをなす（表1参照）。このことから、「介在使役」は「直接使役」と「間接使役」の中間に位置づけられ、これら3つの使役タイプを連続的に捉えることができる。「使役」に関するこのような捉え方は、「直接使役」と「間接使役」とに二分する従来の一般的な捉え方とは異なるものである。^{8, 9}

使役的意味	統語構造	主体と対象の間の因果連鎖
直接使役	単文構造	直接的
介在使役	単文構造	間接的
間接使役	複文構造	間接的

表1 澤田（2008）による使役の分類

ここで言われている「直接使役」は (2i) の解釈に、「間接使役」は (2ii) の解釈に対応する。¹⁰

4. 第3の使役文はいらない：粒度という考え方

ところが、少し考えてみると、因果関係を（特に）語彙的使役文で表す時には、私たちは様々な存在を無視していることに気がつく。例えば、

(14)a. Our science teacher melted the metal.

b. Vitriol melted the metal.¹¹

⁸ 使役の種類については、Tamura et al. (2010) を参照

⁹ 直接使役と間接使役の区別について、例えば、Wolff (2003: 2) は次のような説明している。「女性がドアノブを回してドアを開けた」場合、女性の動作とドアの状態の間には直接使役の関係があり、“She caused the door to open.”とも“She opened the door.”とも言える。一方、「女性が窓を開けたら風が部屋に吹き込んでドアが開いた」場合、女性の動作とドアの状態には間接使役の関係があり、“She caused the door to open.”とは言えても、“She opened the door.”とは言えない。

¹⁰ では使役的意味として「介在使役」とは何か？と疑問になるが、4節で議論するようにそのような意味的カテゴリー（及び統語的カテゴリー）は必要ないと思われる。

¹¹ これらの英文は Joseph Tabolt 氏にネイティブチェックをして頂いた。

- (15)a. 理科の先生が金属を溶かした。
 b. 硫酸が金属を溶かした。 (一部改変. 前田 2021: 60)

同一の出来事に対して、a と b の言い方が可能であり、どちらも語彙的使役文である。b の文が言えるにもかかわらず、a の文を言うということは、*vitriol*「硫酸」という存在を無視していることになる。すなわち、語彙的使役文で因果関係内の存在を無視することは何ら不思議ではない。だとすると、3 節で紹介した「介在使役 (文)」というカテゴリーをわざわざ想定する必要はなさそうである。

- (16)a. *Mary cut her hair:* Mary – ~~Hairdresser~~ – Hair
 b. *Our science teacher melted the metal:* Teacher – ~~Vitriol~~ – Metal

では、因果連鎖内の存在を無視することは、一体何によってもたらされているのか。以下では、これを「粒度 (Granularity)」という観点から考えてみたい。まず粒度という概念を理解するために、以下の引用を見ていく。¹²

- (17) 遠くから見れば秀麗な富士山も、近づくにつれて、岩石の露出した荒々しい姿に変わる。また、遠くから見ればきれいなビルも、近づいて見ると、ひび割れてすすけた壁面のビルだったりする。
 (桑原茂夫「ちょっと立ち止まって」光村図書 中学 1 年 国語教科書)

この文章では粒度という言葉そのものは出てこないが、ある対象を見るときにどの縮尺でそれを見るかによって見え方が異なることが説明されている。この時の縮尺が粒度と言い換えられる。富士山の例で言えば、粗い粒度 (*coarse-grained*) (=大きな縮尺) で見ると綺麗だが、細かい粒度 (*fine-grained*) (=小さな縮尺) で見ると荒々しい。

すると、直接使役と呼べるようなものは実際には存在しないように思えてくる。この点について、Pinker は次のように述べている。

- (18) Direct causation is something of an illusion; under a sufficiently powerful microscope, it vanishes from sight. When I cut an apple, I first decide to do it, then send neural impulses to my arm and hand, which in turn causes the muscles to contract, causing the hand to move, causing the knife to move, causing the knife to contact the surface of the apple, causing the surface to rupture, and so on. [...]. When

¹² 粒度の説明の例として出水孝典氏よりご教示頂いた。

we describe an event, we have to choose a grain size below which the subevents are treated as invisible. (強調筆者. Pinker 2007: 67)

(直接使役は錯覚みたいなもので、強力な顕微鏡を使えばそれは消えて無くなってしまふ。例えば、「私がリンゴを切る」というのは、まず「切ろう」と決めて、その後、神経刺激が腕、手へと伝わり、今度はそれによって筋肉が収縮し、手が動き、ナイフが動き、ナイフがリンゴの表面に触れ、表面に亀裂が入り、といった具合である。[...] 私たちが出来事を描写するときには、1つの粒度を選ばざるを得ず、それより下の粒度ではより細かな出来事は無いものとして扱われる。) ¹³

I cut an apple 「私がリンゴを切る」という文は語彙的使役文であり、直接使役を表すとされるが、より細かい粒度でこの出来事を見ていくと、その中にはいくつもの因果連鎖が含まれていて、最初の直接使役はもはや直接使役とは呼べなくなってくる。究極的には、直接使役は素粒子レベルで語らなければならないのかもしれない。

そのため、言語使用者は知らず知らずのうちに粒度を選択し、その他の要素を無視していることになる。では、粒度の選択はどのようにされるか。以下は1つの説明の例である。

(19) We look at the world under various grain sizes and abstract from it only those things that serve our present interests. Thus, when we are planning a trip, it is sufficient to think of a road as a one-dimensional curve. (強調筆者. Hobbs 1990: 542)

(私たちは様々な粒度で世界を捉えており、そこからその場の関心に合ったものだけを取り出している。例えば、旅行の計画を立てている時には、道を1次元の曲線として捉えるので十分であるように。) ¹⁴

(19) では、言語使用者の目的や関心に応じて粒度が選択されると述べている。

つまり、(16) に提示した因果連鎖内の存在が無視されることは、言語話者の目的に応じて粒度が選択された結果だと説明できる。次の対比を見てみよう。

(20)a. The key opened the door. <道具主語構文>
b. I opened the door (with this key). <Agent 主語構文>

(21)a. The pilots bombed Hanoi. <Actor 主語構文>

¹³ 筆者訳

¹⁴ 筆者訳

b. Nixon bombed Hanoi.

<間接使役構文>¹⁵

(長谷川 2010: 30)

(20) において、何によってドアを開けたのかが問題になっている時には (20a)、誰が開けたのかが問題になっているのなら (20b) が適切だろう。また、(21) において、ハノイを爆撃するのは当然戦地にいるパイロットであり、より正確に (より細かい粒度) で出来事を描写するなら (21a)、ニクソンの次の一手が注目される中、新聞の見出しにするのなら (21b) が適切だろう。このように、粒度選択の結果、因果連鎖の中から言語化される対象が抽出され文が作られている。

この粒度の選択は日英語に限らず、あらゆる言語に存在しているだろう。とはいえ、どの程度の粒度が好まれるかは言語によって違うと想像される。日英語に関して言えば、英語の方が日本語よりも細かい粒度を好むと言えるかもしれない。本発表では「メアリーが髪を切った」に対応する英語として *Mary cut her hair* も使われることを紹介したが、実際には英語母語話者内でも揺れがあるようだ (金子 2013: 20-23)。一方、日本語母語話者にはこのような揺れはあまり見られないと思われる。また、無生物主語構文に関して日英語の違いが指摘されてきた。

(22)a. The key opened the door. (=20a)

b. ??鍵がドアを開けた。(熊 2009: 2)

一般に日本語の方が英語よりも道具主語構文を避ける傾向にある。ドアが開くという結果をもたらした、より厳密な原因 (すなわち、細かい粒度選択によって取り出されうる原因) が人ではなく鍵といえる状況だったとしても、日本語では (22b) のようには言いにくい。¹⁶

また、粒度を別の角度から考えることでその他の日英語の違いも見えてくる。粒度を、物事を描写する際の「厳密性」と言い換えた箇所がいくつかあったと思うが、厳密に語らない (=粒度選択が荒い) ことは聞き手の推論に任せる割合を大きくする (その逆も然り)。冒頭の (1) がそうであるように、話し手が (2ii) の情報を伝えるためにこの文を発話したとすると、聞き手はこれを文字通りの解釈 (=2i) ではなく、「髪は美容院に行って切ってもらうもの」という世界知識を働かせて、(2ii) と解釈しなければならなくなる。より細かい粒度を選択して、

(23)メアリーが美容院で髪を切ってもらった。

¹⁵ 本発表の介在使役文と同義。

¹⁶ とはいえ、日本語でも常に無生物主語構文が容認されないというわけではない。このあたりの議論については、熊 (2009) を参照。

と言った方が、聞き手側の推論の負担は少ない。このように、粒度を聞き手側の推論の負担の度合いとして捉えてみると、使役文に加えて、日英語の名詞修飾節における違いも粒度の違いとして考えることができる。¹⁷

- (24)a. [小豆を煮ている]匂い
b. *the smell [(that) someone is boiling adzuki beans] (八木 2016: 57)
c. the smell [(that) adzuki beans give off when someone boil them] (作例)

(24a) のように日本語の連体修飾は修飾節と名詞との間に文法関係が明確に見られない場合にも成立するが、対応する (24b) の英語は不適格で、仮に関係節を用いて表現するならば (24c) のように、「何が発した匂いなのか」を明確にしなければならない。つまり、英語はこの点を聞き手の推論に任せることができない点で、やはり日本語より細かい粒度を好む言語だと言えるかもしれない。

5. まとめ

本発表は *Mary cut her hair* 「メアリーが髪を切った」という表現を対象に、粒度という概念を導入して考察を行った。日英語ともに（そして日英語に限らず）粒度の選択が行われており、その結果として様々な文が使われる。ただし、どのような粒度で文として言語化するかという点で言語間に違いが見られることが想像され、日英語の「使役文」や「名詞修飾節」に限っていえば、英語の方が日本語よりも細かい粒度を好むと言える。

参考文献

- 鄭聖汝. 2006. 『韓日使役構文の機能的類型論研究：動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ』 東京：くろしお出版。
- 長谷川明香. 2010. 「英語における間接使役構文の動機づけ」、『東京大学言語学論集』 30、27-37.
- Hobbs, Jerry. R. 1990. “Granularity.” In Weld, Daniel. S. and Johan. de Kleer (eds.) *Readings in qualitative reasoning about physical systems*, 542-545. California: Morgan Kaufmann.
- 金子輝美. 2013. 「英語の間接使役表現-He built his house を中心に-」 *Language &*

¹⁷ この論点は、第23回日本語用論学会での発表（2020年11月28日、オンライン）の際に頂いた堀江薫氏の指摘に依る。

Literature (Japan) 22, 16-37.

Komatsubara, Tetsuta. 2019. "Cognitive Principles Underlying Predicational Metonymy: Metonymic Preference of Aspect of Predicates in Japanese Intermediary Causative Constructions." *Cognitive Linguistic Studies* 6(2), 247-270.

前田宏太郎. 2021. 「粒度から考える他動詞文の主語」六甲英語学研究会 6 月例会 発表資料.

前田宏太郎. 2021. 「他動詞文における語用論：介在性の他動詞文」『日本語用論学会第 23 回大会発表論文集』 57-64.

Pinker, Steven. 2007. *The Stuff of Thought*. New York: Viking.

佐藤琢三. 2005. 『自動詞文と他動詞文の意味論』 東京：笠間書院.

澤田淳. 2008. 「日本語の介在使役構文をめぐって：認知言語学と語用論の接点」、児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語と認知のメカニズム：山梨正明教授還暦記念論文集』、61-73、東京：ひつじ書房.

Wolff, Phillip. 2003. "Direct Causation in the Linguistic Coding and Individuation of Causal Events." *Cognition* 88, 1-48.

八木孝夫. 2016. 「日本語の名詞修飾節の分類について：英語表現との対応から考える (上)」『英學論考』 45, 57-86.

熊鷹. 2009. 『鍵がドアをあけた：日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』 東京：笠間書院.

熊鷹. 2014. 「日本語無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因とその関係」『学習院大学大学院日本語日本文学』 10、94-110. / 由本陽子. 2011. 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』 東京：開拓社.

辞書

『新英和大辞典』第 6 版 研究社

検定教科書

『国語 1』光村図書 中学校 1 年 (2012 年-2015 年使用)